

## 「生ける主と出会う人生」

使徒言行録 22 章 1 節～16 節

2024年4月14日  
松田 基子 師

私たちは3月31日にイースターを祝い、イエスキリストの復活を喜びたたえました。

神の御子は神様の人類救済のご計画に従って預言されてきた通り、全人類の神様への背きの罪を一身に負って身代わりの十字架にかかり、罪を償い、あがなわれました。神様は御子イエス様による十字架のあがないを受け入れ、人類への罪の赦しと交わりの回復の証明に、イエス様を十字架の死から3日目に復活させられました。この時、イエス様は霊の体に復活されました。霊の体というのは、決して幽霊のようなものではありません。これまでの肉体を備えながらも時間と場所に制約されない体です。十字架前と変わらず弟子たちと食事を共にし、神の国について教えを与えられましたが、鍵のかかった部屋に自由に入って来られ、又、瞬時に姿を消されました。そして復活後 40 日目には、その霊の体をもって永遠の世界に帰られ、神様の右の座に着かれました。神様の右の座に着かれたということは、もうそれで人間との関わりを持たなくなったという意味ではありません。右の座とは、神様の權威の執行者になられたという意味です。この後はイエス様を通して全てが行われるのです。

ではイエス様の人類に対する最大の願いは何

でしょうか。それはご自身が十字架にかかってまで成し遂げられた罪による永遠の滅びからの救いを、全ての人が受け取って、イエスキリストを信じ従い、天の御国に帰ってくることです。イエス様はヨハネ福音書 14 章 6 節で「私は道であり、真理であり、命である。私を通らなければ、だれも父のもとに行くことができない」と言われました。イエス様は十字架にかかり復活してこの御言葉の意味を表されました。

イエス様はこの救いの福音を弟子たちに託されましたが、イエス様の素晴らしさとその真実は、弟子たちがイエス様の救いを語る時、共に居て、その実体として働き、救いを実感させて下さることです。そして、信じた者の一生に亘って、その心に語りかけ、共に歩み、導き、助け、天の御国まで連れて行って下さるのです。イエス様が復活されたという意味は、こういうことなのです。

生ける信仰はこの復活されたイエス様との交わり、その御声を聞いていくところにあります。キリスト教の真実はそこにあります。このことが今朝のテーマです。

さて、復活し天に帰られたイエス様から声をかけられて信仰の目が開かれ、人生が全く変えられた人物にパウロが居ます。今朝の聖書箇所はパウロが伝道生涯の終盤に、エルサレム神殿に於いて反対者たちの煽動で捕えられて後、弁明した箇所です。パウロは、復活して天に帰られたイエス・キリストの声を聞いたことによって、その人生が全く変えられ、キリストの復活の証人となったこと、

それもキリストの命を受けて、全ての人の救いのために外国人の宣教に遣わされたことを述べようとしていました。実はこの外国人も救われるということが、選民意識の塊になっていたユダヤ人には、イエス様を救い主メシア とすることに加えて許しがたいことだったのです。

パウロは、神様の全人類を救いたいとの御心を伝えたいのです。そこで先ず、「わたしはキリキア州タルソスで生まれたユダヤ人です」と同胞であることを訴えました。パウロが生きた紀元1世紀の時代、地中海を囲む世界はローマ帝国の支配下にあり、帝国内は自由に行き来することができ、特にユダヤ人は歴史的にも離散の民として何代にも亘って各方面に進出し、ローマの市民権を得た人々もいました。

パウロはそのような家庭に生まれました。彼が生まれたのはカトリックによると紀元8年とされています。現在のトルコの南部、地中海から15km程内陸部に入ったタルソスという中心都市で生まれました。タルソスは交通の要所で、商業、文化が栄え、ギリシャ哲学、詩、演劇、スポーツが盛んで、アテネやアレクサンドリアに並ぶ、ギリシャ文化が栄えた都市でした。彼の家庭は厳格なユダヤ教徒で、律法を忠実に守ることによって神様に従う生き方を表したファリサイ派に属していました。ユダヤ人たちは会堂を持ち、そこで礼拝と共に子供の教育が行われました。彼らは母国のヘブライ語と世界公用語のギリシャ語、両方の言葉で聖書を学びました。パウロはユダヤ人として一人前に

扱われる儀式、バルミツバを受ける12~3歳の頃と推定されていますが、エルサレムに行って律法の師ガマリエルの門下で学んでいます。どのくらいの期間、エルサレムに居たのかわかりませんが、イエス様の十字架の時期である紀元30年頃は故郷タルソスに戻っていました。彼は青年時代にギリシャ文化盛んなタルソスで哲学や修辞学を学び、豊かな教養を身につけました。

しかし彼の心はユダヤ教に没頭し、律法を熱心に守ることによって神様から喜ばれ、合格点をもって神の国に迎えられることを目的としていました。パウロは更に律法に生きようとエルサレムにやってきました。律法は正しい道を教えるものでありますが、生まれながらに罪に傾き易い性質を持つ人間に、それを完全に守ることは全く不可能なことです。そこで人間はどうするのでしょうか。自分に向けるには耐え難く、他人を切る道具にしてしまったのです。律法主義社会となりました。

パウロはイエス様の十字架の後、その弟子たちが「イエス様は十字架に死なれたが、3日目に復活し弟子たちに現われ、天に昇られ神の右の座に着かれた。このお方こそ神の御子であり、真のメシア救い主である。このお方を信じて救われなさい」と大胆に語る姿を見て大変な憤りを覚えました。「なんと神を冒瀆する輩だろうか、こんなことを許してはならない。」パウロは自分の正義感を神様の御心だと思い込んでキリスト者を迫害しました。それはステファノの殉教に立ち会った紀元36年頃、パウロが20歳代後半の頃でした。彼は迫害を逃れ

て北方へ逃げて行ったキリスト者の後を追いかけて、ダマスコを目指して行きました。彼はその時の出来事を振り返って聴衆に向かって述懐し始めました。22章6節に「旅を続けてダマスコに近づいた時のこと、真昼ごろ突然天からの強い光がわたしの周りを照らしました」とあります。そのような光の前に人間は地に倒れ顔を伏せるほかありません。するとさらに驚いたことはパウロの耳に言葉が響いてきたのです。「サウル、サウル、なぜ私を迫害するのか」と。自分の名が呼ばれ、「わたしを迫害するのか」とは何という問いでしょう。自分は、自然をも支配し天から声をかけられる、神様としか言いようのない存在に対して、齒向かったことなど全く身に覚えのないことでした。ですからパウロはその正体を知りたかったのです。「主よ、あなたはどなたですか。」それは主よ、つまり私の全存在を握っておられる、生かすも殺すも、その御手に握っておられるお方よ。「いったいあなたはどなたですか」との問いでした。すると声の主は「わたしはあなたが迫害しているナザレのイエスである」との答えが返ってきました。それは思い及ばない言葉でした。「何ということだ。」受け入れ難いことでしたが、天からの声を聞いた以上、否定のしようがありませんでした。「ナザレ派の人々が言っていたことは本当だったのだ。」イエス様の声を直接聞いたからにはどんな理屈も通用しません。兜を脱いで、十字架にかかれたナザレのイエス様は、弟子たちが証言している通り、復活し天に帰られ、神の右の座に着かれた正真正銘の神の御子

なのだ、そのことを認めざるを得ませんでした。パウロはこれまでの信仰と人生がいったんに崩れてしまいました。パウロはそこで、自分を捨ててイエス様に尋ねました。「主よ、どうしたら良いでしょうか。」もう自分には正しい道が分からなくなりました。天からの声は「立ち上がってダマスコへ行け。しなければならないことはすべてそこで知らされる」と答えられました。

パウロには落ち着くべき時間が必要でした。使徒言行録9章には、パウロが回心した時の様子が詳しく記されています。真昼の太陽より輝く光を浴びたパウロは目が見えなくなり、手を引いてもらってダマスコに入り、3日間、目が見えず食べも飲みもしなかったとあります。彼には飲食よりも求めたものがありました。それはイエス・キリストご自身です。彼は必死に祈りました。自分の努力で神様に認めてもらおうとして、自分の考えで神様に従ってきたつもりになっていた間違い、神様を冒瀆していたのはイエス様と弟子たちではなく、自分であったことに気づくと悔い改めの祈りが湧き上がってきました。

イエス様はパウロの許に信仰深いアナニアを送って、神様のご意志を伝えさせられました。神様はアナニアを通してパウロの目を再び見えるようにされました。そしてアナニアは22章14節でパウロに言いました。「私たちの先祖の神があなたをお選びになった。それは御心を悟らせ、あの正しい方に会わせて、その口から声を聞かせるためです。あなたは見聞きしたことについて、全ての人に

対して、その方の証人となる者だからです」と。

パウロは復活して天に帰り生きておられるイエス・キリストが、何故、自分のようなキリストに敵対する者に現われて、命を取り罰するどころか、ご自分の復活の証人とならせて神様の奥義を悟らせて下さるのかを思うと心が震えました。パウロの心にイエス様の大きな愛、神様の大きな愛が押し寄せて来ました。神様の愛と義（正しさ）が成り立つためには、罪なき者の身代わりがなければならぬことは預言されてきたことです。イエス様は聖霊によってそのことをパウロに悟らせてくださいました。

さて、パウロはコリント第1の手紙15章5節から、復活されたイエス様と会った人々のリストをあげています。「ケファ（ペトロ）に現れ、その後12人に現れ、次いで500人以上もの兄弟たちに同時に現れました。次いでヤコブに現れ、その後、すべての使徒に現れた」と、地上で復活のイエス様に出会った人々を列挙した後で、8節に、「そして最後に月足らずで生まれたようなわたしにも現れました」と言っています。しかし、パウロは地上でイエス様とは会っていません。復活されて天に帰られたイエス様は、殉教者ステファノの最期に彼の目に現れたと記されていますが、その後は姿ではなく声をかけておられます。

ところで神様はご自身の意志を人間が理解することができるよう、人間に言葉をお与えになりました。言葉こそ神様の御心を知る手段として与えられたものです。しかし、神様のご意志を知るた

めには言葉だけでは不十分です。心が必要です。心が頑なであっては相手の言葉を受け入れることができません。言葉は心と心で紡ぎ合い、受け入れ、決断し、行動に移して実を結んでいきます。復活されたイエス様の姿を見ただけではイエス様のご意志は分かりません。そこに心通う生ける交わりは生まれません。ですから、天に帰られたイエス様から御心の道を教えていただくためには私たちが御声を聞くことです。そして御声に応答して行く交わりに生かされて初めて信仰は成り立つのです。

信仰はこの生きておられる主との霊的な交わりなくして、生ける信仰とは言えません。それがなければ信仰は苦痛です。パウロはそのようにして、復活し生きておられるイエス・キリストに出会い、その人生は真に神様に従う人生に変えられました。

私たちにもパウロのようにイエス様の声が直接聞こえたら、私はもっと信仰の確信が持てるのに、と多くのキリスト者は思っています。しかし皆さん、イエス様は別の方法で皆さんに語っておられます。

私たちには聖書が与えられています。イエス様はこの地上で神様の御心を教えられました。この地上で生きられたイエス様は天に帰られてから別のイエス様になられたのではありません。同じイエス様です。

私たちが知るべき救いの約束、神の国の到来、永遠の命等、イエス様はこの地上でお語りになり、それは聖書に残されています。新共同訳聖書の巻末には、「新約聖書における旧約聖書からの引用箇所一

覧表」というのがあります。それを見る時に、旧約聖書の預言は新約、つまりイエス様で成就していることが分かります。イエス様は今日、私たちが聖書から神様の御心を悟ることができるようにしてくださっているのです。しかしそれには聖霊の助けが必要です。聖霊がその真理を解き明かしてください。そのために私たちは神様の前に心を静めて聖霊の導きを求めなければなりません。

ところで私たちはマザーテレサの働きを思い出す時、あのような働きはキリストが共に働いておられるとしか考えられません。マザーテレサは、あの大きな働きを始めるきっかけは「全てを捧げてスラム街にまで、あのお方キリストに従い、貧しい人の中の一番貧しい人の間でその方に仕えるという招きを聞いたのです」と言っています。その声に従ったマザーテレサでした。その後、路上で見捨てられ死にかけている人の中に、キリストの苦しみの声を聞き取り、彼らに人生の最後を人間らしく迎えさせる「死を待つ人の家」への働きが始まりました。マザーテレサは、マタイによる福音書 25 章 36 節からの「キリストは『わたしが飢えて、裸で、病気で、家なしだった時に、あなたがわたしのためにしてくれた』とおっしゃった。この言葉の上に自分の仕事の全が成り立っています」と言っています。マザーテレサは、聖書に記されたイエス・キリストの言葉を、聖霊によって生けるイエス・キリストから聞いたのです。

このように、聖書に御心が示されたことによって、今日、イエス・キリストは心を込めて御声に聞き入

ろうとする者に対して、聖霊の働きを通して聖書からその御心を示してください。そこに生きる時、イエス・キリストとの生きた交わりが与えられ、主イエス・キリストは生きておられることを体験すると共に、そのキリストに従って生きることによって、人生は神様の御心に向かって変えられ、永遠の命への確信をもって生きて行くことができるのです。

私たちはこの体験に生かされて初めて信仰の確信と喜びに生きることができるのです。イエス・キリストは今日も変わらず聖書を通して語っておられます。御声が心に響いてくるまで静まり聞き入りましょう。そして御声に従い、キリストとの交わりの喜びを得させていただきましょう。その喜びに生かされ、互いに生けるイエス・キリストを証し合って参りましょう。

お祈り致します。

憐れみ深い天の父なる神様

私たちは今日、聖霊の助けによって聖書から主の語りかけを聞くことが出来る恵を感謝します。私たちを、主の御前に静まって御声を聴き、応答し、生ける主との交わりに生きる者とならせてください。

イエス・キリストの聖名によってお祈り致します。アーメン